



あの林の中さ行ぐだい

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

宮沢賢治に「噴火湾（ノクターン）」という詩がある。

詩集『春と修羅』第一集の終り近くに載る。亡くなった妹トシのその後の居場所を捜す樺太旅行途上での作品である。中心的な素材はもちろんとし。一九二二年十一月に亡くなるトシが、その年の七月、兄賢治に伝えた言葉が、そのまま兄弟で交わされた花巻方言で書かれる。胸が締めつけられる賢治詩の表現であり、彼の独壇場でもある。

おらあど死んでもいゝはんで／あの林の中さ行ぐだい／うごいで熱は高くなつても／あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんで

花巻の町にまだかつてない才媛と、小学生時代からいわれたトシである。学力・才能だけではない。彼女のいる場所にはいつも、心頼れ

る姉のような信頼で結ばれる人々の輪ができた。日本女子大学卒業式に病気で欠席した彼女のために、寮監が卒業証書をわざわざ花巻まで届けにきたというエピソードが残る。一九一九年大正八年の東京と花巻である。上野で汽車に乗り、仙台で乗り換え、一人の学生に一枚の卒業証書を手渡すためにである。稀有なことといえる。

そのトシが若い自分の命に換えてまでも行きたい林とは、彼女にとっていったい何なのか。私には知る由もないし、そこに迫る力もない。ただ、自分の暮らしの周辺に、もちろん比喩としての文字通り心象の林でいい、すべてを投げ出せるような場を求めてきたか。少なくともそのような視点で、自らを見詰めたところがあるか。賢治を学び続けてきた者として、今更ではあるが立ち止らざるを得ない。（なお賢治には「林

と思想」という小詩もある。彼の魂が林と交流する心象の一面に触れることができる。）

目を民話に向ければ、そこにも自然の精髓と向き合う物語が次々と用意される。例えば丸子東内地区の「枝垂れ榎」がそれである。晩秋、群れで渡ってくるツグミの精と若い佐吉の何年かの暮らしの物語は、せんせんとした清流の気配に満ちて美しい。そしてそれは即、この物語を語り重ねてきた人々の心の清すがしさに連動する。民話の醍醐味である。

さて、ここずっとこの欄で「死」に関わって考えてきた気がする。今回でそれを封印する。「生」に目を向けたと思う。ただ当然だが、基本的に死にさまで向き合うこと抜きに生きさまで思うのは、片手落ちだ。死にさまとは、過去の積み重ねに立つ現在を見据えることで成立する、終末の姿だと思っている。自分の年齢とは無関係に、心をそこに置いて民話と関わりたい。



第 15 便
2018.2.1

塩田平民話研究所

〔事務局〕
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2

☎268-49-1231



▼今頃読んでいるのかと言われてしまいうだが、今、エクトル・マロ作の「家なき子」（岩波少年文庫）を読んでいる。ただでさえ読むのが遅い

のに、心を打たれた場面は後戻りして読み返すため、なかなか先に進まない▼主人公のレミは苦難の多い少年期を過ごす、そんな中でも彼を心から信頼し愛情を寄せてくれる人々と出会う。感受性の強いレミの優しい目は、家族として、また仲間として暮らした動物たちにも注がれる。貧しい暮らしの中で、それらの人々とささやかな幸せを分け合い、喜び合う姿が細やかに描かれる。訳者である山内義雄氏の力量も大きいと思う▼先日、座間市で9人の若い男女が殺害されるという凄惨な事件が起きた。被害者の9人は、SNSで自殺願望があることを発信していたという▼国も時代も違う物語の主人公と単純な比較はできないが、彼らにはレミのように暮らしの中でささやかな幸せを分かち合える相手はいなかったのだろうか。事件の異質な点はよくメディアで取り上げられるが、その根本にある被害者の若者たちの「死にたい」という孤独の現状が全く見えてこないように思う。社会問題としてしっかり目を向けなければ、またこのような事件が起こるのではないか。

（和枝）